【複式】　提案

# 主体的に学び合う複式教育

## ～対話が深まる場の設定をめざして～

### １．研究テーマ設定の理由

#### （１）学校提案とかかわって

本校学校提案では，「学びは対象・他者・自己と対話することで成熟していく三味一体の活動である」としている。「対象との対話」とはその対象（教科等で扱う教材や題材）に子どもたちがどうかかわるかということである。また，「自己との対話」とは，「対象との対話」と「他者との対話」を通してその過程で生まれてくるものと考えられる。つまり「他者との対話」が深まると，それにともなって「自己との対話」も進むと考えられる。複式という形態を研究するという観点から，３つの対話の中の「他者との対話」に絞って研究を進めたい。

「他者との対話」とは，友だちの意見に同意したり，友だちの意見と対立したり，友だちの意見と自分の意見とを絡め合わせて深めたり，といった場面が必要になってくる。この点で，「少人数」の複式学級では，友だち同士の深いつながりが創りやすい。また学年が進むにつれてさらにつながりが深くなっていく。本校でも，公立の複式学級設置校と同じく，６年間クラス替えがない。少人数の固定されたメンバーで過ごすことになる。この友だち同士の深いつながりをもたせやすいという利点をいかして，「他者との対話」を促したい。

また，複式にはもう一つ「異学年」という特徴がある。「他者」の中に違う学年の友だちがいることで，子どもたちの姿勢に次のような効果があらわれる。

① 上学年の子どもたちは，下学年の子どもたちのお世話をしたり，面倒を見たり，教えてあげたりする。ときには下からのプレッシャーを感じ，いつも以上にがんばろうとする。

② 下学年の子どもたちは，上学年の子どもたちを目標にしたり，あこがれたり，役に立とうしたり，必死になって追いつこうと努力する。

③ 下学年から上学年になることにより，下学年のときにしてもらったことを上学年になって自然と真似をして下学年に返してく。

④ 上学年から下学年になることにより，また新たな上学年という目標ができ，さらに成長しようとする意欲を自然と持つことができる。

このように「異学年」という特徴から，「他者との対話」の幅を広げられるという利点をいかしたい。

#### （２）複式部でめざす子ども像

複式学級は，１時間の授業で直接指導と間接指導がある。そのため特に間接指導において，子どもたちが自分たちで授業を進め，自分たちで課題を解決していき，自分たちで次の課題を見つける意欲や行動力が要求される。そこには子ども一人だけではできない，「協同」の場での主体的な学び合いが必要になる。より深いかかわりの中で，友だちを認める寛容さと友だちに要求する

厳しさ，友だちの要求に応えようとする誠実さがあるからこそ，意欲や行動力が表出してくるのである。そんな友だち同士の「協同」の場での主体的な学び合いができる子というのが，複式部でめざす子ども像となる。

そこで，複式部では，本年度研究テーマを「主体的に学び合う複式教育～対話が深まる場の設定をめざして～」と設定した。

## ２．複式教育における「学びの質の高まり」

学びの集団として，思考の多様性・ひろがり・深まりを生み，「学びの質の高まり」をめざすためには，子どもたちが指導者から教えられることを受動的に受け取るだけでなく，より緻密に教材との対話をしていく必要がある。そのためには，指導者の言葉だけでなく，子ども同士が友だちの言葉を取り入れつつ，自分の言葉に置き換えて表現し伝え合うことが大切である。そうすることが，自分のたちの考えをより質の高いものに更新していくことになるのである。

他者と対話し，そこで得た新たな視点や疑問・知識・技能をいかして，対象と，また自分と対話する。つまり，複式学級の学びでは，課題についてどれだけうまく他者と対話できたかにより「学びの質の高まり」が期待できると言えるだろう。「子どもたちが，感じたことや考えたことを話し，相手の考えを聴き，そこに自分の考えを加えて伝える。そして，それを意欲的に繰り返すことで課題を解決していこうとする状態」が対話が生まれている場であると考える。

複式学級は，「少人数・異学年」という特性から一人ひとりのより濃密な対話や異学年との対話が可能である。その特性を生かして，一人ひとりが友だちとの対話をすることで，質の高い学びを成立させることが，複式教育のめざすところである。

## ３．研究の展望

対話が生まれるための「場の工夫」を模索したい。複式学級では

①個人での学びの形態，②同学年ペアでの学びの形態，③同学年４人グループでの学びの形態，④異学年ペアでの学びの形態，⑤異学年４人グループでの学びの形態，⑥１個学年別全体学びの形態，⑦２個学年全体の学びの形態などの場を設定することができる。

学年や教科，教材・題材，各単元によって，どの形態において対話が深まりやすいのかを探っていく。

## ４．研究の評価

研究の検証方法としては，同時に２つ以上の「場の工夫」を行うことは不可能である。したがって，類似した教材・題材や単元で，違う形態を試行することで比較するほかない。ビデオや録音，授業記録，児童の書いた文章などしっかり記録を取り比較する。また比較する場合，大きく見るのではなく，できるだけ細やかなみとりを大切にし，比較・検討できるようにする。